

# 北大病院薬剤部 NEWS

薬剤部 広報誌担当 (内線5683) Vol. 39 (2013年07月18日発行)

## ステロイド (副腎皮質ステロイド) 治療について

副腎皮質ステロイド(ステロイド)は、副腎という組織から分泌されているホルモンです。ステロイドは免疫やアレルギー、炎症を抑える作用があるため、膠原病、気管支喘息、肺炎、腎臓病、皮膚病、アレルギー疾患など、さまざまな病気の治療薬として使われています。今回は、ステロイドの副作用や使い方などについてご紹介します。



### ■ステロイドによる副作用■

- 感染症**：投与量の多い場合 (20mg/日以上および、総投与量1g以上) は、特に感染症にかかりやすいので抗菌薬で治療や予防をします。
  - 消化性潰瘍**：投与量の多い場合や胃腸の弱い方は、胃粘膜を保護する薬や胃酸分泌抑制剤で治療・予防します。
  - 不眠などの精神症状**：眠れない方は、睡眠導入剤で十分な睡眠を取るようにします。
  - 骨粗鬆症**：予防的に骨を強くするお薬を内服することがあります。
  - 白内障・緑内障**：ステロイド緑内障は点眼治療で頻度が高く、眼圧の上昇は約2週間でみられることがあります。白内障はプレドニゾロン換算で10~15mg/日 (成人)、1~3mg/日 (小児) の6か月投与後に頻度が急増します。
  - 高血糖や糖尿病**：ステロイド治療中の糖尿病の発症頻度は5~10%程度といわれています。
  - 高血圧**：ステロイド開始後1~4週間で少しずつ血圧が上昇し、減量すると元に戻ることが多いです。
- \*：ここに記載した以外の副作用も考えられます。また、副作用の出現・リスクには個人差があります。

### ■ステロイドの中止■

ステロイドを急に中止すると離脱症候群が起こることがあります。これはステロイドを長期間多量投与した場合 (プレドニゾロン換算で20mg/日を3週間以上) に生じやすく、発熱、悪心、嘔吐、倦怠感、関節・筋肉の痛み、血圧の低下、低血糖などを伴います。そのため、ステロイド剤を減量する際は、30mg/日までは1~2週の間隔で5~10mgずつ、30mg/日以下になると2.5~5mgずつ減量するなどの対応がとられます。

### ■ステロイドの薬剤間の対応量■

全身投与ステロイドには内服薬と注射薬があります。経ロステロイドはそのままの形で作用を発揮できる活性型が製剤化されていますが、注射薬は生体内で活性型に変換されて初めて薬効を発揮します。

作用時間分類	一般名	商品名	臨床的対応量(mg)*	力価比(対コルチゾール)		内服薬と注射薬との換算の考え方
				抗炎症作用	電解質作用	
短時間型	ヒドロコルチゾン (コハク酸)	コートリル錠 サクシゾン注、ソル・コーテフ注	20	1	1	通常、用量調節は必要ないとされていますが、経口剤から注射剤に変更する際には、経口剤の10%程度を増量する必要があるとの考えもあります。 (静脈内注射では一部が抱合型のまま人から排泄されるため)
	(リン酸)	水溶性ヒドロコルチゾン注				
	プレドニゾロン (コハク酸)	プレドニン錠、プレドニゾロン錠 水溶性プレドニン注				
中間時間型	メチルプレドニゾロン (コハク酸)	メドロール錠	5	4	0.8	
	(リン酸)	ソル・メドロール注	4	5	0	
	トリアムシロロン (アセトニド)	レダコート錠(当院採用なし) ケナコルト-A注	4	5	0	
	デキサメタゾン (リン酸)	デカドロン錠 デカドロン注	0.75	25~30	0	
長時間型	ベタメタゾン (リン酸)	リンデロン錠 リンデロン注	0.75	25~30	0	

\*：コルチゾールの平均分泌量 (20mg) に対応する投与量 ステロイド「服薬指導のためのQ&A」より (一部改編)

アスピリン喘息患者ではコハク酸エステル構造に過敏であることが知られています。そのため、コハク酸エステル型ステロイド量、数10から1,000mg急速静注で強い喘息発作が生じる恐れがあります。

一方、国内のリン酸エステルステロイドのほとんどは、アスピリン喘息患者が反応しやすい亜硫酸塩やパラベンなどの添加物を含んだ水溶液であり、その急速投与もやはり安全とはいえません。

以上の理由よりアスピリン喘息が否定できない場合には、上記に述べた以外のステロイドを使用する事が推奨されます。

### ■ステロイドの局所投与■



ステロイドの局所投与には吸入、塗布、点眼などがあります。これらの投与方法はいずれも、病変部位で高濃度のステロイド投与を達成でき、全身性の副作用を免れることが可能な投与方法です。

## Staff Interview

難波 正志



午前中は注射調剤室、午後は11-1病棟 (眼科・腫瘍内科) で薬剤管理指導業務を行っています。眼科は手術入院の患者さんが多く、外科的治療が主に行われますが、薬剤師としてどのように治療に関わっていくべきか日々試行錯誤しながら業務を行っています。